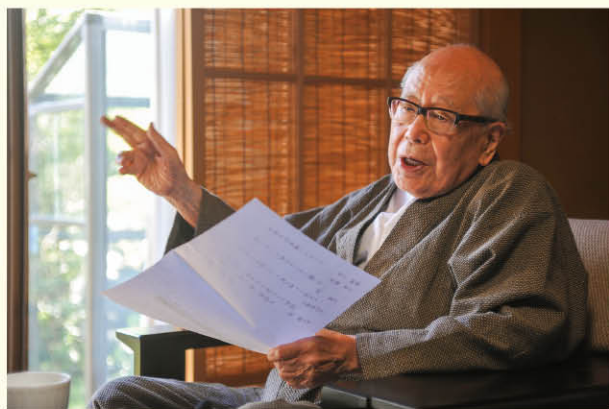


開館35周年記念企画展

金子兜太展

しかし日暮れを急がない

9月14日[土]～11月24日[日]

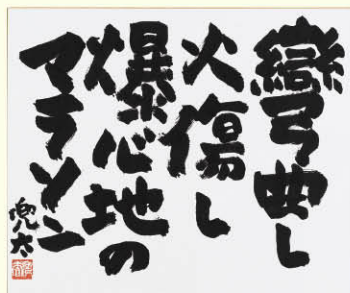


金子兜太 96歳 2015年 撮影 樋口一成

かねこうた

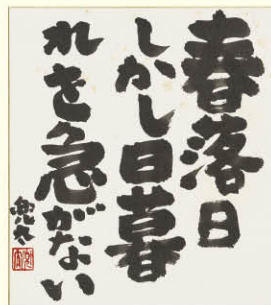
金子兜太(1919～2018 埼玉県生まれ)は、前衛俳句、社会性俳句の中心的存在として戦後を代表する俳人。生まれ育った秩父への思いや、小林一茶への共感などを根底に創作活動を繰り広げた。太平洋戦争中、海軍主計中尉として赴任したトラック島(現チューク諸島)での戦場体験から、反戦への思いを晩年まで持ち続けた。

本展では、その生涯と作品の魅力を紹介し、今日における“俳人兜太”の意義を探っていく。



「彎曲し火傷し爆心地のマラソン」色紙
当館蔵

『金子兜太句集』(1961年 風発行所)所収。
日本銀行長崎支店に勤務しているときの作。



「春落日しかし日暮れを急がない」色紙
個人蔵

『両神』(1995年 立風書房)所収。

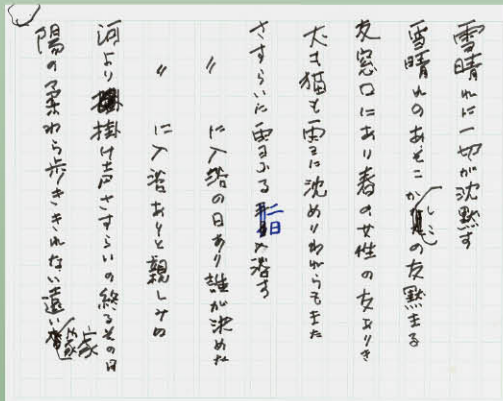
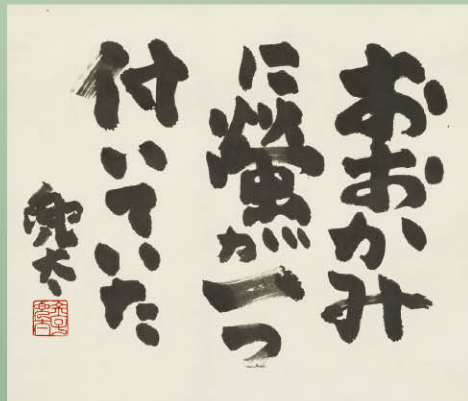
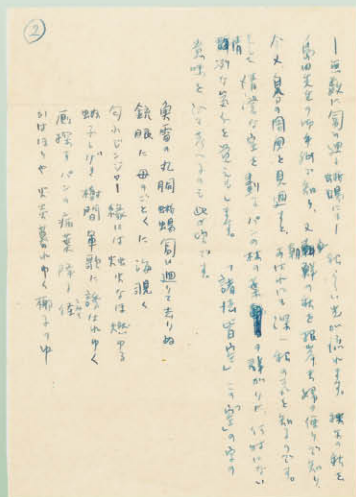
そのことばのつづきへ



山梨県立文学館

Yamanashi Prefectural Museum of Literature

金子兜太展 しかし日暮れを急がない



3

4

1 金子兜太 父・元春宛書簡(部分) 1944(昭和19)年11月1日

この年3月に赴任した戦地のトラック島で書かれたと思われる。2枚目に戦地での作6句が記されている。
元春(1889~1977)は、開業医で俳人、俳号・伊昔紅(いせきこう)。

2 金子兜太 筆「秩父俳句道場」の会場に掲げた看板

「秩父俳句道場」は、兜太を中心とする「海程」同人たちの鍛錬会。1979年から2017年まで続いた。

3 「おおかみに螢が一つ付いていた」軸装

『東国抄』(2001年 花神社)所収。

4 遺作となった9句の句稿

「海程」第541号(2018年4月)掲載。

*資料1~4は個人蔵。

葬列、白いのは犬

梯久美子

「たくさんの方が死んで、あなたは生き残った。死んだ人たちと、生きていく自分について、話してもらえないでしょうか」

金子さんとの電話でそう頼んだのは、二〇〇七年の秋だった。一面、誠もない高名な俳人に、著書がまだ一冊しかない駆け出しが、よく言ったものだと思う。

私のデビュー作は、太平洋戦争末期の硫黄島の戦いをテーマにしたノンフィクションだった。取材で訪れた硫黄島は、戦後、一般住民の帰還が許されず、米軍の駐留をへて自衛隊の基地の島になっていた。そのため戦場の風景が残り、地下にはおよそ一万柱の日本兵の遺骨が残されたままだった。置き去りにされた遺骨の眠る土地の上を、私は歩いたことになる。

本を書いたあと、硫黄島の戦死者たちのことは一生忘れられないだろうと思った。けれども、死者を自分の中に住まわせるとはどういうことなのかよくわからない。遺族でも研究者でもない自分が、非業の死者たちのことを勝手に書いてよかったのだろうか、不安になることもあった。

そんなある日、雑誌に載った金子さんのインタビューを読んだ。健康法を聞かれ、金子さんは毎朝、立禅りっぜんをしていると答えていた。立禅とは金子さんの造語で、座禅の代わりに立ったまま瞑想する。その際、縁のあった死者の顔と名前を一人ずつ思い浮かべるのだという。百人以上になるその人たちの多くが、二十代の頃、海軍主計中尉として赴いたトラック島の死者だと金子さんは語っていた。

この人は、いまでもそんなふうにして死者と付き合っているのか、と思つた。私は雑誌「俳句」の版元である角川書店の編集者に、金子さんにインタビューできないか電話で相談した。編集者は、では金子さんに聞いてみましょうと言ってくれた。するとその十分後、金子さん本人から直接電話がかかってきた。驚く私に、金子さんは言った。

「とりあえず、あなたの話を聞こう」

私は自分の気持ちをつつかえながら正直に話し、そのあと冒頭のよううに頼んだのだ。しばらく考えていた金子さんは「よしわかった」と言った。あの声と口調を、いまでも忘れない。明快にして闊達。否定よりまず肯定。あの言葉は金子さんそのものだ。

そして私は、金子さんの自宅や、選句を終えたあとの朝日新聞社の喫茶店で、長時間のインタビューをするようになった。

部下や同僚、金子さんが現地で聞いていた句会に参加していた人など、印象的な人たちの話が数多く出てきた。金子さんは全員のフルネームと出身地を覚えていて、まるでいま目の前にいるかのように、その人たちを鮮やかに描写した。死者も生者もごちやまぜで話が進み、私は時々「その人は生きてるんですか、死んでしまったんですか」と確認しなければならなかった。

「こいつは生きてるよ。そいつは死んだ。面白いやつだったけどな」

話を聞いていると、生死にかかわらず、どの人も金子さんの中にいることがわかってくる。生きていた時間とともに過ぎた死者は、死んでしまった後の時間を飛び越えて、しゃべっている金子さんのもとにやってくる。金子さんの話を聞いている私も、ひととき、その人たちと出会う。そんな感じがした。

戦争をテーマにした名句が金子さんにはたくさんあるが、ここではトラック島で詠まれた句を紹介したい。

葬列、白いのは犬

空襲 よくとがった鉛筆が一本

当時、金子さんから句会に誘われたという木水育男氏が、手記「トラック島戦記」の中で引いている句だ。木水氏は「死の寸前で従容として俳句を作り、廻りの人にすすめる金子氏の姿に強い衝撃を受けた」で、自分も句会に参加したと書いている。

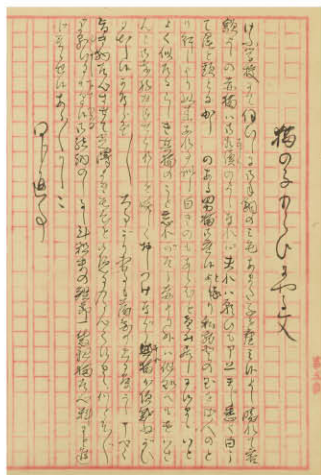
（かけはしくみこ ノンフィクション作家）

新収蔵品展

2025年2月1日(土)～3月23日(日)

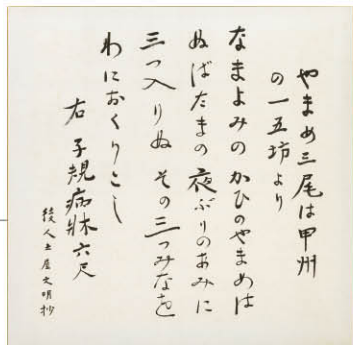
2024年に新たに収蔵した樋口一葉、井伏鱒二の原稿、高浜虚子、土屋文明の書画などの資料を展示します。

観覧無料



樋口一葉「通俗書簡文」草稿
(未定稿C「猫の子もらひにやる文」)軸装

書簡の文例集『通俗書簡文』は、一葉が生前に刊行した唯一の著書。同書は博文館が発行する叢書「日用百科全書」の第12編として、1896(明治29)年5月25日に刊行された。同年11月23日に24歳で死去した一葉最晩年の筆跡を残す数少ない資料。



土屋文明筆 正岡子規歌「やまめ三尾は甲州の一五坊より」額装

富士吉田市の俳人、柏木白雨^{はくろう}旧蔵の書。本書に書かれている長歌は、正岡子規^{しんめいいちごぼう}が、門下で甲州在住の俳人新免一五坊^{しんめいいちごぼう}からもらった、山中湖を水源とする桂川のヤマメを詠んで「病牀六尺^{びょうしやう}」に発表した作品。後年、土屋文明^{きこう}が白雨の依頼を受けて揮毫した。

常設展

第1室～第4室(展示室A)

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第1室で期間限定展示を次のとおり行います。

秋の常設展「生誕130年 田中冬二と山梨」 2024年8月27日(火)～12月1日(日)

冬の常設展「山崎^{はうだい}方代 生誕110年」 2024年12月3日(火)～2025年3月2日(日)

第5室(展示室B)

山梨県出身・ゆかりの文学者104名をジャンルごとに前後期に分けて展示しています。

後期: 詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

2024年10月1日(火)～2025年3月2日(日)

イベントガイド

※講演会・座談会は、電話または当館ホームページのイベント欄からお申込みください。
ワークショップは電話のみのお申込みとなります。

企画展「金子兜太展 しかし日暮れを急がない」関連イベント

講演会「兜太と龍太 ―その交友の歳月―」

9月16日(月・祝) 午後1時30分～午後3時

講師: 井上康明(俳人・「郭公」主宰)

会場: 講堂 定員: 300名 無料



井上康明氏



佐佐木幸綱氏

講演会「金子兜太さんのこと」

9月29日(日) 午後1時30分～午後2時30分

講師: 佐佐木幸綱(歌人・国文学者・「心の花」主宰)

聞き手 三枝昂之(当館館長)

会場: 講堂 定員: 300名 無料

座談会「兜太作品の原点を語る ―第一句集『少年』・第二句集『金子兜太句集』を中心に―」

10月26日(土) 午後1時30分～午後3時

講師: 高野ムツオ(俳人・「小熊座」主宰)、高山れおな(俳人・「^{あに}「^{まんぼう}翻車魚」同人)、
佐藤文香(俳人・「翻車魚」「鏡」同人)

会場: 講堂 定員: 300名 無料

はんこ彫り(篆刻)ワークショップ

10月27日(日) 午後1時30分～午後3時30分

講師: 望月煌雅(甲州手彫印章伝統工芸士 一級印章彫刻技能士)

会場: 研修室 定員: 20名(小学校4年生以上) 材料費: 800円

その他のイベント

※各イベントの詳細や申込み方法は、当館ホームページやチラシで順次発表します。
ご確認の上、お申込みください。

三枝浩樹 短歌教室

12月14日(土) 午後1時30分～午後3時30分

講師: 三枝浩樹(歌人)

会場: 研修室 定員: 40名 無料

長田群青 俳句教室(全2回)

俳人・長田群青氏による講義・実作指導。2回とも出席できる方のみ受付可能。

1回目 2025年1月26日(日) 午後1時30分～午後3時

2回目 2025年2月16日(日) 午後1時30分～午後3時

会場: 研修室 定員: 30名 無料

声に乗せて味わう児童文学 ～原きよ朗読教室～

2025年2月2日(日) 午後1時30分～午後3時30分

講師: 原きよ(朗読家・アナウンサー)

会場: 研修室 定員: 20名(小学校3年生以上・大人も参加可能)

年間文学講座

*講座1・2ともに午後2時～午後3時30分 会場:研修室 定員:100名 無料

*講座3は午後2時～午後3時10分 会場:研修室 定員:60名 無料

*電話にてお申込みください。なお、講座1は定員に達しましたので受付を終了いたしました。

*講座2・3については年間を通してのお申込みも可能です。また先着順で定員になり次第締切になります。

講座1 (古典分野)

藤原道長と紫式部のライバルたち 一大河ドラマの世界を同時代の史料と文学作品から読むー

講師:池田尚隆 (山梨大学名誉教授)

10月12日(土) 藤原道隆の死と中関白家の没落

11月 2日(土) 藤原道隆死後の藤原定子と一条天皇

12月 7日(土) 藤原定子と藤原道長の娘彰子

2025年 1月25日(土) 清少納言と紫式部

講座2 (近現代分野) 健全と不健全のあいだ 一日本近代の犯罪小説を読むー

講師:古川裕佳 (都留文科大学教授)

10月 8日(火) 谷崎潤一郎「途上」

11月12日(火) 谷崎潤一郎「白昼鬼語」

12月17日(火) 木々高太郎「文学少女」

講座3 作家と作品 当館の学芸員が講師を務めます

10月 6日(日) 中野和子(当館学芸員) 金子兜太展のみどころ

11月10日(日) 伊藤夏穂(当館学芸員) 生誕120年 四尾連湖畔の詩人 野沢一

名作映画鑑賞会

11月 9日(土)「天地悠々 兜太・俳句の一本道」 脚本・監督:河邑厚徳

出演:金子兜太 山根基世(語り)、本田博太郎(朗読) 74分(申込開始日 10月11日)

2025年 2月 1日(土)「伊豆の踊子」 原作:川端康成 監督:西河克己

出演:吉永小百合、高橋英樹、浜田光夫 他 87分(申込開始日 2025年1月7日)

*2回とも上映は午後1時30分から。 会場:講堂 定員:300名 無料

*電話または当館ホームページの「イベント」欄の申込みフォームからお申込みください。

先着順で定員になり次第締切となります。

閲覧室

入場
無料

資料紹介

定期的にテーマを設け、所蔵している図書、雑誌を紹介しています。

資料は、直接手に取ってご覧いただくことができます。



閲覧室資料紹介

「俳句への誘い 企画展『金子兜太展』関連」

9月13日(金)～11月24日(日)

「児童文学の翻訳者たち」

2025年 1月 2日(木)～ 3月23日(日)

山梨ゆかりの文学者資料紹介

「誕生日にちなんだ資料紹介 山崎方代 生誕110年」 11月27日(水)～12月25日(水)

「野尻抱影 生誕140年」

2025年 3月26日(水)～ 4月23日(水)

閲覧室トーク

11月20日(水・県民の日) 午後1時30分～午後2時 先着10名

閲覧室の利用案内や、書庫で保管している貴重な図書・雑誌についてご案内します。

*事前に電話または閲覧室カウンターでお申込みください。

寄贈資料より

(2024年2月～7月)

- 出澤忠利氏より「取材記者 清水三十六 山本周五郎、最後のサラリーマン生活」リーフレット1点、雑誌1点。
- 株式会社印傳屋上原勇七より宇野千代コラボデザイン 印傳屋上原勇七製品1点。
- 谷口典子氏より堀内幸枝宛栗津則雄書簡など特殊資料66点。
- 三橋透氏より市川きよみ宛福田甲子雄書簡1点。
- 金田祥子氏より佐佐木茂索宛小林一三書簡1点、豊田三郎葉書1点。
- 萩原茂氏より「井伏鱒二と太宰治の出会いと別れ」抜き刷り1点。
- 中村光吉氏より中村璋撮影1950年代河口村モノクロフィルム1点(42枚)、図書1点。
- 小尾正恵氏より菅佐智子宛中村星湖書簡2点。
- 志村雄一氏より志村さゝを「遠山火」原稿など特殊資料88点。
- 若林卓也氏より若林賢明撮影飯田龍太写真ボジフィルム1点(5枚)、図書18点。
- 古谷晶子氏より北原白秋「松風のしくるゝ寺の前とほとりとほる人はあれと日の暮のかけ」短冊1点。
- 備仲臣道氏より備仲臣道「叙事詩 ガザ」印刷資料1点。
- 柏木定子氏より土屋文明筆・正岡規歌「やまめ三尾は甲州の一五坊より」額装など特殊資料216点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

相澤邦衛	雨宮清子	雨宮慶子	岩田恵	内海宏隆	大下一真	小沢啓子	黒沢忍
小林将輝	五味正弘	清水昭三	董振華	内藤明	永井良和	中沢明子	中村吾郎
中村恵	西口徹	濃野初美	野村循子	花里鬼童	廣瀬町子	復本一郎	藤田博
藤森富士夫	古屋清	堀本裕樹	松本章男	吉田恵理	米倉伸哉		

この他に団体の方々からもご寄贈いただいております。

ご案内

Information

内容が変更になる場合がございます。ご来館前に当館ホームページを必ずご覧ください。

開館時間

展示室	午前9時～午後5時 (入室は午後4時30分まで)
閲覧室	午前9時～午後7時 (土・日・祝は午後6時まで)
ミュージアム ショップ	午前9時30分～午後4時20分

*営業時間は変更になる場合があります。

休館日(10～3月)

10月	7・15・21・28日
11月	5・11・18・25日
12月	2・9・16・23・28・29・30・31日
1月	1・6・14・15・16・17・18・19・20・21・27日
2月	3・10・12・17・25日
3月	3・10・17・24・31日

展示室観覧料

*11月20日(水)県民の日はどこでも無料です。

	常設展(特設展)		美術館との 共通券	企画展		常設展と企画展の セット券
	個人	団体 (20名以上)		個人	団体	
一般	330円	260円	680円	600円	480円	740円
大学生	220円	170円	340円	400円	320円	490円

*高校生以下の児童・生徒、65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳をご持参の方、およびその介護をされる方は無料です。

*団体料金は20名様以上の団体、県内宿泊者割引適用。

施設利用のお申込みについて

- 講堂・研修室・茶室のお申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- お申込みは開館日の午前9時より受け付けます。文学館チケット売場まで申請者の印鑑をお持ちのうえ、お越しください。
受付時間は午前9時～午後4時30分です。
- 電話での仮予約が可能です。本申請前にぜひご活用ください。(055-235-8080)
仮予約の受付時間は午前10時～午後4時30分です。
- いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意はお申込みの際、ご説明いたします。

交通のご案内

中央自動車道甲府昭和インターチェンジより

- 料金を昇仙峡・諏訪方面へ出て200m先を左折、西条北交差点左折、アルプス通りを約2km直進、貢川交番前交差点を左折、国道52号を約1km左側。

JR中央本線甲府駅より

- JR甲府駅バスターミナル(南口)1番乗り場より、39系統 御勅使、03・04系統 竜王駅経由で数島営業所、35系統 大草経由で葦崎駅、30系統 貢川団地各行各きのバスで約15分、「山梨県立美術館」下車。

- ※山梨県立文学館ホームページからも、バスの時刻表をご覧ください。

- タクシーで約15分。



Xでタイムリーに
情報をお届けしています。
山梨県立文学館

@yamanashi_art_literature_park

ホームページ



そのことばのつづきへ

山梨県立文学館

Yamanashi Prefectural Museum of Literature

〒400-0065 山梨県甲府市貢川1-5-35
TEL: 055-235-8080 FAX: 055-226-9032
https://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/